

## 座長のまとめ

山下 公一（金沢医大）

最後の群の3演題はエアロゾル療法の実際についての基礎的問題（秋田大今野ら）と、欧州に見られる本療法の進歩（京都市兵）（帝京大佐藤）に関するもので、いずれも出席者の興味をとらえ、終了予定時間を延ばして発表と討議が行なわれる状況であった。

今野ら（秋田大）は「鼻副鼻腔炎に対するエアロゾル療法の問題点——鼻副鼻腔換気の立場より」と題して、エアロゾルを副鼻腔に移行させるには鼻腔内と洞内の空気の置換を行なう必要があり、洞の換気量とエアロゾルの洞内移行量とはネブライザーの圧変化に比例する。病変高度の例では効果が期待できないので鼻内手術で中鼻道を開放する必要がある。鼻副鼻腔粘膜から薬剤は確実に吸収され、パニマイシンでは経口摂取に比較して明らかに高い血中濃度が得られたことなどを実験から立証した。このようなエアロゾル療法の根底を支える基本的研究は本療法が科学的基盤の上に乗って発展してゆくために必須であり、海野（旭川医大）、臼井（東邦大）、大山（鹿大）らの発言で討議が白熱した。残念ながら時間の余裕がなく、充分できなかった討議は次の機会にゆずられた。

兵（京都市）は「フィブラチオンス・エロゾール療法（第2報）」と題して、通常のネブライザーや超音波ネブライザーのエアロゾルを含んだ気柱に vibration を与えて振動させる Vibrations Aerosol Therapie について、実験を8mm映画で供覧し、この方法の利点を紹介した。この方法はわが国では取り入れられていないが、欧米では新しいものではなく、すでに一般化しているという。このような装置と方法がわが国でも開発普及されることが望まれる。

佐藤（帝京大）は「第1回オーストリア・エアロゾル・シンポジウムに参加して」と題して、Graz市で開催された同シンポと post-congress tour の実地見学の内容について紹介した。

以上、本研究会は昨秋京都で武の会長のもとに気管食道科学会の際に第1回が開催され、今回は金沢での気管食道科学会の機会に第2回を迎えたが、すでに研究会として演題、内容ともに望ましい一つの形が定着しつつあるように思われた。エアロゾル療法は戦後急速に普及し、現在では一般臨床に欠くことのできない手術となっているが、反面これを系統的に研究整理された理論的基盤がしっかりしておらず、耳鼻咽喉科学の中で忘れられたように取り残されていた問題であった。今後の発展が期待される。